

## フィリピン台風被災者救援事業に従事して

国際医療救援部 主事 宮脇 貴子

派遣地域:フィリピン共和国

派遣期間:2008年6月26~7月17日

2008年6月19日(木)、フィリピンの東方海上で発生した台風6号は、南部から中部地方を直撃、被災地域は38州に及び、この台風による死者は540人、被災者はおよそ362万人と報告されました。また、この台風による高波で、中部沖で乗員・乗客ら861名を乗せた大型フェリー「プリンセス・オブ・ザ・スターズ」号の沈没事故が発生し、42名が救出されましたが、多くの人々が行方不明となりました。日本では、このフェリーの沈没事故が大きく報道されました。

フィリピン赤十字社の各被災州支部では、被災直後から調査、食糧配布、清潔な水の供給活動などが精力的に行われ、またマニラにあるフィリピン赤十字社の本社では、日本赤十字社が支援して整備された災害対策本部室にて、各機関などと調整が行われておりました。今回、新しく整備された対策本部室は、「非常に便利です」と、スタッフも称賛しておりました。



(日赤により整備された災害対策室。中央で陣頭指揮をとるフィリピン赤十字社ゴードン社長)

一方、国際赤十字連盟は約8億円規模の暫定緊急アピールを発表しました。日本赤十字社はアピールに対し2,000万円を連盟に拠出。さらに被災状況把握等のため、連絡調整員として私が派遣され、またフィリピン保健医療事業でキリノ州(ルソン島北西部)に派遣されていた看護師2名を被災地に派遣し、フィリピン赤十字社の救援チームとともに現地で救援活動に従事させることとしました。

私の役目は、2名の看護師の安全に配慮し、日赤とフィリピン赤の橋渡しをするような「連絡調整員」でした。これまでの派遣は期間も長く(最低6か月間!)、内容もプロジェクト運営が中心で、どちらかというと単独で働くことも多かったのですが、今回は2名の派遣初心者の看護師を率いる初の「チーム・ミッション」であり、期間も3週間と短く、チャレンジの多い内容でした。が、昨年まで派遣されていたフィリピンであったため、比較的安心感もあり、現地入りすることができました。

フィリピンに深夜到着し、その翌日早朝からフィリピン赤十字社で情報収集などを行い、そしてその日の夜に被害が甚大と言われていたイロイロ市へ移動しました。台風が過ぎてから1週間たっていたこともあり、市内は比較的落ち着きを取り戻していました。が、それは市内が比較的高台にあったためで、低地は床上浸水がひどく、また川が氾濫したため橋が壊れ、孤立した地域も多くありました。

フィリピン赤十字社の支部では、多くの学生ボランティアが集まり、食糧配布活動の準備をしていました。米と魚の缶詰を1パッケージにし、避難所に避難している方々を対象にして配布していました。



(イロイロ支部で食糧配布の準備を行うボランティア)

結局イロイロ市では連盟から派遣されていた「RDRT:Regional Disaster Response Team:地域災害対策チーム」に合流し、看護師という職種を生かし「HEALTH:保健衛生部門」を中心に調査活動に加わることとなりました。とはいえ、調査活動に慣れていない新人 2 名と保健衛生の専門知識を持ち合わせていない私と、正直なところ不安もありましたが、国際赤十字のネットワークを生かし、RDRT やフィリピン赤十字社のサポートを受け、無事にこなすことができました。比較的災害規模も小さく、HEALTH 部門での必要も少なかったことも幸いでした。

4 日間イロイロ州で調査活動した後、報告等も兼ねて一度マニラに戻りました。そこで新たに、ア克蘭州カリボ市の被害も大きいと聞いたため、急きょカリボ市へ移動することとしました。カリボ市はフィリピンの有名なリゾート地である「ボラカイ島」に近く、私も何度か訪問したことのある街でした。そこが、台風による水害で泥で覆われており、2 週間近くたっても電気や飲料水の供給など、生活基盤が安定していませんでした。



(泥で覆われた商店街)



(家を失った人々)



(2 階部分が風で壊れた赤十字ア克蘭支部)

被害調査では日中に村落を訪問し、夜に報告書を仕上げ、翌朝までにマニラに送信し、そしてマニラでその情報を元に支援活動が検討されます。村落訪問も疲れる部分ですが、その夜に報告書をまとめる作業が、また大変な部分でした。特に提言の部分でフィリピン赤十字社との整合性をとるか、日本での医学的知識をとるか、ということで判断に苦しみました。そのことも含めてフィリピン赤十字社に報告しましたが、調査方法や報告書作成の訓練などを含め、さらなる勉強が必要と強く感じました。

今回、担当要員として2006年10月から半年間手がけていた南レイテ州地滑り災害復興支援事業が2008年3月に終了したことから、完成後の状況確認を兼ね、南レイテ州を視察することとなりました。私は計画段階で事業に携わったのですが、今回初めて実際に計画した建物が建設され、修繕され、そして人々が使用している姿を目の当たりにすることができました。



(日赤の支援で建設された小学校で学ぶ子ども達)

計画段階では、被災者の姿がみえない業務内容でしたが、子どもたちが新しい学校で学ぶ姿や、青少年がバスケットをしている姿など、支援が実際に活かされている場面をみることができ、非常に感銘を受けました。台風救援事業で初期救援活動に従事し、その仕上げとして復興支援事業の完成後を視察することができました。災害が起こり、調査がされ、支援金が集まり、そして復興への支援が形となる。そのサイクルのはじめとおわりをこの3週間でみることができ、今後の国際救援活動への礎石となったように思われます。改めて、事業を成功へと導いたフィリピン赤十字社、日本赤十字社の力の大きさを知ることができました。

最後に、常に丁寧にサポートして下さった皆様、またフィリピン赤十字社のスタッフ、ボランティアの精力的な活動に感動すると共に、そのホスピタリティに感謝したいと思います。



(フィリピン赤十字社スタッフと宮脇主事)